

2024年2月18日（日）主日朝礼拝説教

『楽園からの追放』井上隆晶牧師

創世記3章1～13、20～24節、マルコ福音書14章22～26節

### ①【人生の二つの生き方】

創世記3章は人間の罪と死の始まりについて書かれています。エデンの園の中央に「命の木」と「善悪の知識の木」がありましたが、これは人生の二つの生き方を象徴しています。神はアダムに「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」（創世記2：17）と命じられました。聖書は食物の話で始まります。人は生きるためには食べなければなりません。この世は人間への食べ物として神から与えられました。「食べる」とは「生きる」ことですから、「食べるな」とは「生きるな」という意味になります。善悪の知識の木から食べるな、というのですから「知識を手に入れて生きるという生き方をしてはならない。そうすると必ず死んでしまう」という意味になります。一方、聖書で「命」とは神のことを指しますから「命の木」から取って食べるとは「神によって生きる生き方をしなさい」という意味になります。神は人間に自由意志を与え、最初から神と共に生きる生き方と、神から離れて生きる生き方の二つを選択させたということなのです。

### ②【誘惑＝神のようになれる】

蛇（悪魔）は女にいました。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」（創世記3：1）神は「園のすべての木から取って食べなさい」と言われましたから、悪魔は神とまったく逆の言葉を語るのが分かります。神はいいかげんな方であると思わせ、エバの心を不安にさせ神に対して疑いを起こさせるためです。エバは「私たちは園の木の果実を食べても良いのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」（3：3）と答えます。エバは命の木も禁じられた木として入れてしまい、「触れてもいけない」という言葉も加えてしまいました。そこで悪魔は「決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」（3：4～5）と嘘を断言します。悪魔の誘惑とは、「神のようになれる」という言葉から十戒の第一の戒め「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」（出エジプト20：3）を破らせるのが目的だったのが分かります。二人が善悪の知識の木の実を取って食べると悪魔が言ったように目は開くのですが、自分たちが裸であることを知り、いちじくの葉で腰を覆います。「裸」とは弱さの象徴です。人間は自分の弱さを知って恐れ、様々なもので飾り始めたということです。「知恵が深まれば悩みも深まり、知識が増せば傷みも増す。」（コヘレト1：18）という言葉があります。知識を手に入れた人間は、ますます不安になりました。自分で何とかしよう

と思うからです。チエスタンは「神を信じられなくなった人間は、何でも信じないか」といって、逆に何でも信じるようになった。」と言っています。何でも信じる人は無秩序であり、生き方が定まりません。世の中には信じなければいけないものと、信じてはいけないものがあるのです。聞かねばならない言葉と、聞いてはいけない言葉があるのです。神は口から出された言葉を必ず守られる誠実な方です。もし神の言葉が成らなければ、この世界は崩壊します。なぜならこの世界は、神の言葉によって成ったからです。「万物は言によって成った。」(ヨハネ1:3) 神以外に確かな方がおられるとは私は思えません。2世紀のポリュカルポスは、殉教する前に「私は80年以上、この方に仕えてきたが、この方は私を裏切ったことはない。」と言って死んでゆきましたが、私もそう思います。

### ③【命の木に手を伸ばす】

こうして人類は神に背きました。3章22節で神は「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」と言われます。神は「我々」という複数形で書かれ、神は聖三者(父、子、聖霊)であることが暗示されています。「善悪を知る者となった。」というのは、人間は知識を手に入れて神にでもなったかのように思っている、という神の皮肉です。「今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある」というのは不思議な言葉です。命の木こそ人に永遠の命を与えるものです。善悪の知識の木から食べた人間は確かにその魂は死んだのですが、肉体はすぐには死にませんでした。死んだ魂のまま、肉体が永遠に生きることほど不幸はありません。そこで神は人間が罪を犯したまま永遠に生きることのないように人間に死を与えたのです。そして人をエデンから追放し、大天使ケルビムと炎の剣で「命の木」を守りました。教父たちは「人間が死なないようになるのは、人間がもともと持っている力ではなく、命の木に与ることによってである」と言っています。つまりたとえ罪を犯さなくても、命の木の実を食べなければ人間は永遠に生きれないのです。私はこの教父の言葉を初めて読んだ時、とても驚きました。プロテスタントの注解書では、そのような解釈を読んだことがありません。この「命の木」とはキリストであり、その木の実を食べるとは聖餐を意味します。だから聖餐がとても重要になるのです。イエス様自身、最後の晩餐の席上でパンを取り「取りなさい。これは私の体である」(マルコ14:22)と言われ、また「私は天から降ってきた生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」(ヨハネ6:51)と言われました。キリストの聖体こそ命の木の実なのです。キリストの十字架の死によってケルビムの刺繍がしてあつた神殿の垂れ幕は裂け、ケルビムは退き、エデンの園は開き、命の木に至る道が開いたのです。私たちは楽園に帰り、命の木であるキリストにつながり、永遠に生きる者となることができるようになったのです。

#### ④【神を知ることの喜び】

●岡山に津島久雄（つしまひさお）という方がおられました。彼は小学校六年のとき、ハンセン氏病であることがわかり、父母から引き離されて家族教会に入りました。成長するにつれて、教会のために働くことに生きがいを感じていましたが、ある朝、夜が明けるのがおそく思われ、隣人に尋ねたところ、すでに朝であることを知りました。失明していたのです。そのために悩み、自殺の決心もされました。その時、「こんなつまらない私の名を呼んで、お前はわたしのものだ」と言って下さる神を知り、踊り上がるほどの喜びを感じました。その後、教師検定試験を一つずつ受け、ハンセン氏病で初めて、日本基督教団の牧師になりました。その喜びが彼を献身させたのです。

先日、ダビデがサウルとヨナタンのために詠んだ哀悼の歌「弓」のお話をしました。「イスラエルよ、麗しき者は、お前の高い丘の上で刺し殺された。ああ、勇士たちは倒れた。…サウルとヨナタン、愛され喜ばれた二人、鷲よりも速く、獅子よりも雄々しかった。…あなたを思ってわたしは悲しむ。」（サムエル下 1：19、23）サウルといえばダビデを殺そうとした王です。それなのにダビデは彼の死を悲しんでいます。これは驚くべきことです。それはサウルは神が選び、油を注ぎ、立てられた神の器だからです。ダビデの目には「麗しき者、神に愛され喜ばれた者」と見えているのです。だから何があっても決してサウルを傷つけませんでした。ダビデは神抜きでサウルを見たことは一度もありません。神が選んだ者、油を注ぎ、神が愛した者は、どんなに欠点があっても麗しい者なのです。これは皆さんのことなのです。

義母の葬儀が終わって、翌日から受難節（レント）の祈禱に入り疲れしました。「死は親から子への最後の教え」という言葉がありますが、義母の死を通して、神や天の国が良く見えるようになりました。自分も死に近づいたからでしょう。詩編や聖書の言葉がものすごく入って来るのです。古の信者が祈る神についての祈りはすばらしいものです。現代人はこのような祈りはできません。彼らは神を知っています。神を知ることほど嬉しいことはありません。不思議なことに人が亡くなると、その人の善い所が思い出されるのです。聖霊は弁護者ですから、相手の善い所を見させます。一方悪霊は訴える者ですから、相手の欠点を見させます。義母の死を通して聖霊が働いたのです。葬儀は嫌だと思っていたのですが、死を体験することにより神に近づき、また自分が変えられるので葬儀はすばらしい恵みとなりました。どうぞ、レントの間にますます神に近づき、その言葉が素直に信じられますように祈ります。